

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師

竹 田 鐵 仙

は し が き

印度の大乗仏教で最も遅く発達成立した密教は、印度古来のヒンズー教の民衆的な誦呪祈祷を仏教に取り入れて、釈尊の教法によって意義付けたものであると言つてよい。この密教が空海によって支那から日本に伝えられた。一方空海と共に支那に渡つた最澄は天台の教学を伝えたが、教相を主とする天台教学と事相を主とする真言院羅尼とは相容れないものがあつた。空海は大同二年勅により上洛し、弘仁元年には高雄山に護国の大法を修するなどして、嵯峨天皇との道交を厚くしてから、或は高野に或は京都にあって除災招福・請雨修法をなすなど、遂に弘仁十四年鎮護国家の真言道場として東寺を勅賜されたのである。最澄は比叡

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

山にあって空海に対しては師礼を尽して真言密教を尋ねたり、度々と密教の經典を借用したり、或は真言宗は天台宗と優劣なしと言つて両者は強いて親睦を重ねて来たが、その理想に於いては互に相違するものがあつて、何時かは両者の間は疎隔されねばならぬ運命にあつた。即ち最澄の考へは真言宗と天台宗とを調和して、天台宗をして仏教諸宗の中の最上唯一のものとすることであつたのに対して、一方空海の理想は天台宗や華嚴宗の上に真言宗を樹立することにあつたから、遂に両者は相容れないで交通が全く絶たれる至つた。ここに於いて最澄は自己の主張を貫徹し空海の真言密教と対峙する必要上から、弟子等に向つて密教の研究を奨励した。この最澄の訓陶が円仁・円珍の密教学習のための入唐となり、続いてこの円仁・円珍に随い最澄の天

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

台・真言調和の遺志を継承した安然是、空海の立てた真言宗の教学を批判し、取捨撰択してこれを自家薬籠中のものとなし、遂に安然是は彼れ自から北嶺真言宗と称する台密を大成して、ここに開祖以来の遺志を成就し、支那の天台宗に密教その他の教学を加えた日本天台宗を完成した。即ち民衆化に困難な天台の教学に密教の修法を摂めて、真言宗と共に王法即佛法主義を唱えて世俗に調和したのである。

「歴史は繰り返す」と言うならば、鎌倉期の新興仏教も、否現代の新興宗教も、その信教の民衆化を図る所以は歴史の事実を繰り返すものであると言い得るではなからうか。この意味に於いて、高祖の只管打坐一箇半箇説得の叢林宗旨を継承された瑩山禅師が、それを如何にして広く民衆に宣布し、教団の世俗的進出を図るべきかという信念が、当然、瑩山清規や洞谷記にみる統経念誦法式や祈祷行事に現われて、現当二世安穩を願う世俗の希求に答えて、叢林宗旨から伽藍仏教へと、教団の民衆化に専念された行履と信念とを鑽仰せずには居られない。

このような考えから、瑩山禅師が密教的諸分子を摂取融合されるに至った時代背景と修行行脚の道とを調べて、瑩山禅師の清規や洞谷記にみる密教的な分子を取上げて、瑩

山禅師が如何に時代に相応して曹洞禅の民衆化に専念されたかを知りたいと思つて検討に志したが、このことは己に誰れにも考えられていたことで、鈴木泰山氏の「禅宗の地方発展」桜井秀雄氏の「瑩山禅師の生涯と総持寺の歴史」大久保道舟氏の「道元禅師の研究」等の論述に委ねて、ただここには、鎌倉期初頭の幕府を中心とする禅密の交流を述べることによって、瑩山禅師が密教的分子を自家薬籠中のものとして、曹洞禅の民衆化を發想され、それに専念された所以を究明したいと思う。

第一 鎌倉期初頭に観る禅密の交流

一、幕府の創設と社寺の建立

源頼朝が建久二年（一一九一）に鎌倉幕府を創設するや、崇祖のため鶴ヶ岡八幡宮を建てて別当職を置き、建久四年には鶴岡八幡宮寺供僧と、鶴岡両界檀供僧及び鶴岡脇堂供僧の職制を設けて、天台・真言の僧侶をその職に当らしめて、鶴岡八幡宮や持仏堂或はその他の寺で報恩の誂経並に誦呪祈祷を行わしめた。これらの記事は吾妻鏡（新訂国史大系三二卷）鶴岡八幡宮寺社務職次第（群書類従五三卷）

鶴岡八幡宮寺供僧次第（統群書類従一〇四卷）鶴岡両界壇供僧次第・鶴岡協堂供僧次第（統群書類従一〇五卷）等に見ることが出来る。

頼朝は奥州の兵乱も終って世も静まったので、建久二年二月十五日鎌倉の大谷山辺の観音堂の修築を発願し、建久五年二月十八日修造の成った観音堂に参詣、建久五年十二月二十六日には永福寺を新造している。頼家は正治二年（一二〇〇）二月二位禅尼政子の願いにより寿福寺の建立を始め、これを葉上房律師榮西に寄進し、なお頼家は建仁二年（一二〇二）洛東に建仁寺を建てて、共に榮西を開山とした。⁽⁵⁾また正治元年頼朝の薨去後に政子は高野山の金剛三昧院を補修し、榮西を請して落慶法要を行ない、榮西の弟子となった行勇を第一世としている。然しこれについては異論があるが、行勇のところで述べることにする。鎌倉五山の一つとなった浄妙寺は文治四年（一一八八）足利義兼が草創して極楽寺と称し真言宗に属していたが、義兼の子義氏が禅宗に皈して建仁元年これを禅刹に改め、元亨二年（一二二二）に極楽寺を浄妙寺と改称し、北条泰時の草創した東勝寺と共に行勇を開山としている。⁽⁶⁾

鎌倉期初頭の治世のための杜寺の建立修補を見たが、こ鎌倉期初頭に観る禅密の交流と鑒山禅師（竹田）

これらの杜寺を繞ってその政治の中心地鎌倉に集まった天台・真言・禅宗等の宗侶は、何れも密教を離れることは出来なかった。即ち幕府で行なう仏事供養や祈祷は何れも旧来の密教行事であったからである。鶴岡八幡宮の別当や供僧は叡山・三井寺の台密僧や、高野山・東寺の東密僧であった。更にこの頃に鎌倉に居た台密僧には忠快・承澄の師資があり、東密僧には定豪・定清の師資と道範等がある。

忠快（一一六六頃）は建保四年（一二一六）七月二十九日相模河で六字河臨法という大修法を行ない、將軍家の随兵一万騎に及ぶとあり、また同年八月十九日別当定曉僧都が鶴岡宮の傍に北斗堂を造り、その供養に忠快を尊師となし、二位禅尼政子入堂し給うとある。⁽⁷⁾嘉録二年（一二二六）六月十四日には二位禅尼政子一周忌仏事供養のために大慈寺に三重塔を造り、その供養に忠快を尊師としている。⁽⁸⁾

承澄（一二〇五）は忠快から台密の穴太流の嫡流を伝えた小川流の学匠であって、鎌倉の大御谷の阿弥陀寺に居た。彼れはまた道範と共に中世の悉曇の名匠であって、東密の定豪の弟子定清と悉曇論義をしたことが、悉曇字記聞書（信範著大須宝生院文庫蔵写本）に見えている。

定豪（一二三五）は鶴岡八幡宮寺の供僧から承久二年（一

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

二二〇）別当となり、嘉録元年（一二二五）七月十一日二位禅尼政子薨卒、八月二十七日葬儀の導師をしている。

道範（一二七八）は高野山八傑の一つである正智院の学匠で、当時高野と鎌倉を往復し中院流の密教の誦呪祈祷に必要な悉曇の教授に当たっていた。荣西の弟子行勇も行勇の弟子覚心も道範について密教の蕴奥を究めている。

- | | | | | |
|------|--------------|--------|---------|----------|
| (1) | 吾妻鏡 | 十一卷。 | 新訂国史大系 | 三二、四三六。 |
| (2) | 同 | 十四卷。 | 同 | 五〇五。 |
| (3) | 同 | 十四卷。 | 同 | 五一九。 |
| (4) | 同 | 十六卷。 | | 五七二。 |
| (5) | 本朝高僧伝 | 三卷。 | 大日本仏教全書 | 一〇一、八六。 |
| (6) | 高野春秋編年輯録八卷。 | 同 | | 一一一、一五三。 |
| (7) | 吾妻鏡 | 二十二卷。 | 新訂国史大系 | 三二、七二四。 |
| (8) | 同 | 二十二卷。 | 同 | 七二五。 |
| (9) | 同 | 脱漏。 | 同 | 三三、三四。 |
| (10) | 鶴岡八幡宮寺社務職次第。 | 群書類五三卷 | | 三、五〇二。 |
| (11) | 吾妻鏡 | 脱漏。 | 新訂国史大系 | 三三、三一。 |

二、荣西の台密と禅

比叡山にあった荣西は仁安三年（一一六八）四月二十八

才で宋国に渡り、明州の広慧寺で禅を伝えることを果し得ないで、偶逢った日本僧重源と共に天台山に登り、天台の章疏六十余巻を求めて同年九月に皈朝した。この間、荣西は明州の郡主に請われて祈雨の修法を行じて大雨があったのでその恩賞として、修法の間に荣西の身からは千光を発していたというので、国主から千光国師の号を賜ったとある。荣西は皈朝後再び叡山に登り、東谷の葉上房に住して遂に台密の葉上流（建仁寺流ともいう）の一派を開いた。即ち荣西は叡山東谷の習禅房基好から台密十三流の一つである皇慶の谷流から出た穴太流と、横川南樂房願意から覚超の川流とを受けて、荣西はこの谷・川両流兼学の台密からその一流を開いた。

荣西は文治三年（一一八七）四十七才再度の入宋をして、萬年寺の虚庵懷敏に禅の心印を受け、建久二年（一一九一）皈朝し、香椎宮報恩寺博多の聖福寺を開いて菩薩戒布薩を行ない、更に京都に上って達磨宗の能仁等と共に京都に禅寺を建てて禅宗を弘通しようとしたが、築前宮崎の良弁山徒の反対を受け、遂に建久五年（一一九四）七月禅宗停止の宣下となった。ここで荣西は自から志したのか、或は幕府に請されたのか鎌倉に下向して、正治元年（一一九九）

年。九月二十六日には鎌倉幕府で不動尊供養の導師をしてい⁽²⁾る。続いて正治二年正月十三日には頼朝の一周忌の仏事導師を勤めたとあり、更に二ヶ月後の閏二月十三日には二位禅尼政子の御願によって、頼家は栄西のために寿福寺建立の造営を始め、越えて建仁二年頼家は栄西の本願である洛東に建仁寺を建てて栄西を開山としている。これらを観ると栄西の鎌倉下向は、恐らく京都を追われて栄西自からも鎌倉への進出を志し、またたまたま源氏三代を通しての京都への憧憬、京都文化の輸入の企てという進取的な希望とが、新しく皈朝した栄西を迎えることとなったのではないかと⁽³⁾思われる。或はまた元亨釈書に「十一師三事郡之安養寺静心一⁽⁴⁾心者嘗於三井寺二興三西父二同業以レ故就焉」とあって、静心は栄西の父と三井寺に業を同じくしていた。栄西の晩年の著である「入唐縁起」によると「十一就三当国名徳静心。則三井澄義阿闍梨写瓶弟子也」とあって、静心は三井寺の澄義の弟子である。更にまたこれを、鶴岡八幡宮別当職の一代円曉・二代尊暁・三代定暁が何れも三井の園城寺から来ていることを考え合せると、これらの三井寺の宗侶が、栄西の鎌倉下向に何等かの手がかりがあったのではな⁽⁵⁾かろうか。栄西の興禅護国論は真偽について異論はある

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

が、禅宗停止の宣下を受けて五年目の建久九年（一一九八）五十八才の著述であって、南都北嶺の徒の偏執に対する決疑であり、参禅の要諦を示して、興禅は鎮護国家であるとした宣言書である。してみると栄西はこの宣言の翌年正治元年に鎌倉に來たこととなるが、余程の因縁が結ばれていたものと思われる。

栄西が幕府のために修した行事を吾妻鏡に見ると、殆んどが密教修法であるが、建暦元年七月十五日の際に「將軍家御三参寿福寺二御仏事之後於三方丈二及三法談」⁽⁶⁾とあるように、將軍家が屢々寿福寺へ参ったことは吾妻鏡の記載にも見られる所で、一々記してはいないが、恐らくこうした法談が交わされたことは当然であって、修法・仏事に結び付けた禅談がなされたに違いない。建保四年（一二二六）十一月二十四日の条に、將軍実朝が宋人陳和郷から、貴客の前身は医王山の長老であり自分はその長老の門弟であると聞かされて、実朝は大いに好奇心を起して医王山を拝するための渡宋の企てをなし、宋人和郷等に命じて船を造らせ⁽⁷⁾たが役立つ船が出来なかったことを記しているが、蹴鞠を好み管絃・詠歌・歌会を事とし、歌聖定家から詠歌口伝や、相伝私本万葉集を授かり、遂には金槐和歌集を撰した

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

文化人実朝が渡宋を考へることは尤もである。建保二年（一二一四）二月四日柴西は実朝の病悩を加持して良薬に茶を進めて、茶徳を著めた書一卷（喫茶養生記の一卷か）を獻じ、將軍は非常に感悦したということなどを考え合わせる⁽⁷⁾と、実朝は医王山を拝し、且は柴西から聞かされていた宋の宗教文化などの見聞を志しての渡宋の企てであったことが肯かれる。これが後に述べる法燈国師覚心の由良の地に興国寺を開創する所以ともなっている。

柴西の渡宋の目的は広慧寺の知賓との問答に、

我邦台教始祖伝教大師伝三宗⁽⁸⁾而皈。方今台密正熾禅滅者久矣。而承^レ乏^レ之者也。恨^レ祖意之不^レ全矣。故航^レ海来^レ欲^レ補^レ禅門之缺^一。

とあるように、台・密・禅三宗の中で日本に盛えなかった禅宗を伝えて、天台と真言とを調和して成立している日本の台密に、更に最澄が終生の理想であった円頓戒の統一をして台密に包容させることであつた。この理想を実現するために京都から鎌倉へ来て、台密から禅へとその止揚を工夫し、これを幕府に結び付けて寿福寺と建仁寺の巨利を開いた彼れは、建保元年（一二一三）七十三才になって、日頃から望んでいた大師号の下賜を願い出だが、生存中に大

師号を賜った先例がないということでも聞き入れられず、その代りに権僧正に任ぜられた。⁽⁹⁾二十八才で入宋した時に宋土で千光国師の号を賜って来た柴西が、大師号を賜って接化に益したいという民衆的開発の意向を持ったということも、時流に応じた尤もなことだと考えられる。

このようにして柴西は政権を利用して自からの理想を実現しようとしていたのである。柴西が伝えた禅は支那臨済禅の黄流派であつたが、彼れが禅の一宗独立を図らないで台密禅の調和に始終したことは、葉上流という密教の一流を開いた彼れにとつては当然なこととも言えるが、また旧仏教の抑遏下にあつた時代背景に立つた彼れが、意識的に誦呪祈祷をもつて幕府に結び付いて政権を利用することによって、新しく伝えた臨済禅を世に知らせ弘めようと図つた努力が寿福寺・建仁寺の建立となつたものと言わなければならぬ。そしてこれが建保三年（一二一五）柴西の滅後三十一年を経て、寛元四年（一二四六）に来朝した蘭溪道隆を初め宋末元初の乱を避けて渡来した支那の禅僧と幕府との接触をみる所以となり、鎌倉・近畿を中心としての禅宗興隆を見るに至る基礎となつたのである。

(1)	本朝高僧伝	三卷。	大日本仏教全書	一〇一、八四。
(2)	吾妻鏡	十六卷。	新訂国史大系	三三、五六〇。
(3)	同	。	同	五六四。
(4)	元亨釈書	二卷。	大日本仏教全書	一〇一、二三。
(5)	吾妻鏡	十九卷。	新訂国史大系	三二、六五八。
(6)	同	二十二卷。	同	七二六。
(7)	同	二十二卷。	同	七〇九。
(8)	元亨釈書	二卷。	大日本仏教全書	一〇一、一五五。
(9)	吾妻鏡	二十一卷。	同	六九五。

三、行勇の東密と禪

行勇(一二六二)は姓氏不詳、実は四条藤原家の子息であるとしている。幼にして出家し治承五年(一一八二)十九才で鶴岡八幡宮寺の供僧に補任され、永福寺(文治五年造立)大慈寺(建久二年造立)の二院を管していたが、栄西が正治元年(一一九九)に鎌倉に下向し、寿福寺の建立を得て開祖となるに及んで、行勇は密宗から転じて栄西の弟子となり、参禅并道して栄西から印可を受けた。行勇は浄妙寺・東勝寺金剛三昧院の開山となっている。金剛三昧院のことについて、密教辞典(栄西の項)には、栄西が建暦

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師(竹田)

の初め高野山にあって教・律・禅三教興行のため草庵を結び、貞応の頃行勇がその遺志を継いで金剛三昧院を開いたとある。金剛三昧院は禅定院を修補したものであるが、その修補についても説がある。二位禅尼政子が実朝の菩提のために行ったというのと、頼朝の薨去の後政子が金剛三昧院を修補建立して、栄西を落慶法要の導師に請じたという説とがある。(2) この金剛三昧院のことについては吾妻鏡の記録に見当たらないが、同書に見る行勇と幕府との関係記録やその年次等から推して、禅定院の修補は実朝の菩提のために政子が行なったものと見てよい。即ち行勇は建仁三年(一二〇三)から実朝の殺された承久元年(一二一九)の十七年の間に、幕府のため行なった仏事修法が十九回に及んでいるのに対して、永久二年から延応元年(一二三九)三月、泰時の請により金剛三昧院から鎌倉に版り、寿福寺を董するに至るまでの十九年間に、行勇は十二回より少ない。特に嘉禄三年(一二二七)から嘉禎元年(一二三五)に至る七年間は、吾妻鏡には行勇が鎌倉で行なった仏事修法の記録が見当たらない。更に高野春秋編年輯録承久元年三月の条に、

口考、行勇師者為三千光国師之上足一也。一旦活然從頭

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と霧山禅師（竹田）

入_レ密交_レ服。住山九ヶ年中伝_二受密旨_一于道範闍梨。

とある。⁽³⁾住山九ヶ年ということ、前の將軍実朝が夢に現われて、願性をして金剛三昧院を修造せしめよという松上入道行円の夢が、高野山から鎌倉に伝って、二位禅尼政子が願性を別当職として、夢告の如く造修して行勇を道師となし落慶供養を行なった⁽⁴⁾ということとを考え合わせると、金剛三昧院の修造は、恐らく実朝の滅後二位禅尼政子の発願によって、実朝の菩提のために願性を別当職として禅定院の改修がなされ、金剛三昧院と改称して、行勇がその開山となったものと思われる。願性は実朝の昵近の旧臣葛山五郎であって、実朝の渡宋の志はよほど篤かったものとみえ、自分の志を果たさせるために葛山五郎に自分に代っての渡宋を命じた。五郎は命を受けて紀州由良の浜で渡宋の準備をしていたところ、実朝の訃報に接したので、彼れは一念発起して鎌倉には暇らず高野山に登り、禅定院行勇に就いて出家し入道願性と名乗り実朝の菩提を追悼した。このことを知った二位禅尼政子は、五郎の二世の忠勤を受でて由良の地頭職に補し、以って住山の資禄となさしめた。⁽⁵⁾吾妻鏡に見る行勇が幕府のために行った三十余回の仏事修法は殆んど祈祷であるが、その中で見る祈祷以外の仏

事から知られることは、行勇は二位禅尼の篤信を得ていたものとみえ、二位禅尼を通して幕府の年忌供養の導師を勤めたり、將軍や重臣の夫人等の剃髮の戒師をなしている。

承元四年七月八日甲午。金吾將軍室……令_二落飭_一給。

戒師莊嚴房阿闍梨_{若宮供僧} 寿福長老。

（吾妻鏡一九卷。新訂国史大系三二、六五二）

承久元年正月二十八日……辰剋。御臺所令_二落飭_一御。

莊嚴房律師行勇為_二戒師_一。

（同 二四卷。同 七五二）

承久三年正月二十七日壬子。晴。今朝。於_二法花堂_一。修_二故右大臣第三年追善_一。二品沙汰也。導師莊嚴房行勇

（同 二卷。同 七六五）

元仁元年六月十三日……前奥州（義時）病痾已及_二獲麟_一之間。……今日寅剋。令_二落飭_一給已剋。遂以御卒去御年六十二……又後室落飭莊嚴房行勇為_二戒師_一。

（同 二六卷。同 三三、一八）

嘉禄元年八月二十七日。……今日二品御葬家仏事。竹御所沙汰也。導師辨僧正定豪。……未刻。一條太政大臣家御臺所。臨時仏事被_レ修畢。導師莊嚴房行勇

（同 脱漏。同 三二）

嘉祿二年七月十一日。……故禪定二位家周闕御仏事。

於三勝長寿院被修之。……大藏卿法印良信為導師。

……又相州建立塔婆被供養。導師莊嚴房行勇云々

(同) 脱漏。同 四四)

安貞元年七月十一日。……二位家第三年御仏事。丈六阿

弥陀堂供養也。……導師莊嚴房律師行勇

(同) 脱漏。同 五八)

嘉祿二年六月五日。……今日武州於北條修三右京將

(義時) 十三年追善一給。……莊嚴房僧都行勇

(同) 三一卷。同 一七五)

なお、吾妻鏡には記していないが、鶴岡八幡宮寺供僧次第の行勇の伝記を記した中に、

周防国人。二位禪定比丘尼二位為御戒師。奉剃落御髮。

奉埋置彼住坊傍。其上建立護摩堂。奉祈天下安全

宝祚延長御願。依之二位家和字御書散通拝領云々。此息也

(続群書類従 一〇四卷。四下 八九四)

とあって、二位禪尼政子も行勇に就いて剃髪している。

してみると頼朝・頼家・実朝三代の將軍の夫人は何れも行

鎌倉期初頭に観る禪密の交流と瑩山禪師(竹田)

勇を戒師として落飾していることとなり、また政子の沙汰を受けて、実朝の三周忌の導師を勤めていることなどと共に、行勇は単なる幕府の祈禱僧ではなく、十九才から若宮供僧として鎌倉にあって、幕府の寵を受けていたのであって、行勇が榮西に入室した後も、榮西と共に政子の篤信を受けて、幕府からは離れることの出来ぬ存在となっていたものと言わなければならない。また十九才供僧の補任を受けた行勇の経歴と考え合わせて、彼れが京都四条藤原家の息であったという伝も尤もであると思われる。

建保三年(一二二五)榮西の滅後、行勇は寿福寺の長老として榮西に次いで幕府の仏事修法を勤めていたが、実朝の滅後貞応の初めに政子の請を受けて高野山の金剛三昧院に移って開山となり、ここに密教の祖山高野山に、東密と禪の行勇の新しい宗風を通して、鎌倉幕府の威容を高野山に植すこととなったのである。行勇は更に建仁寺に榮西の後を董したが、高野山にある金剛三昧院の重大性から、彼れは幾くもなくして建仁寺を辞して再び金剛三昧院に、販り、建仁寺規に準じて金剛三昧院を顕・密・禪三宗兼学の道場となして、大いに新宗風を挙揚した。延応元年(一二三九)三月七十七才で北条泰時の悃請を受けて、金剛三昧院

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と叡山禅師（竹田）

を弟子隆禅に譲り、覺心上座を伴って鎌倉に還り、寿福寺二世として榮西の後を董いだ。寿福寺には多くの学人が集まり、武士も庶民も大いに皈依し、泰時は淨妙・東勝の二ヶ寺を建てて行勇を請して開山としたが、間もなく仁治二年（一二四一）七十九才で寿福寺に寂した。⁽⁶⁾

- | | |
|-----|------------------------------|
| (1) | 鶴岡八幡宮寺供養次第。続群書類従一〇四卷。四下、八九四。 |
| (2) | 高野春秋編年輯録八卷。大日本仏教全書 一三一、一五三。 |
| (3) | 同 八卷。同 一三八。 |
| (4) | 同 八卷。同 一三九。 |
| (5) | 同 八卷。同 一三九。 |
| (6) | 同 八卷。同 一五三。 |

四、行勇の弟子 願性と覺心

願性は実朝將軍の恠近の旧臣で、前にも述べたように、建保六年（一二一八）十二月実朝から渡宋の命を受けて紀州由良浜にその準備をしていたところ、翌月の承久元年正月七日に実朝が公暁（頼家の子）に殺されたことを聞いて、鎌倉には皈らずに実朝の菩提のために高野山禅定院の行勇に就いて出家した。⁽¹⁾この葛山五郎の入道のことを聞いた実朝の母二位禅尼政子は、願性の二世の忠勤を受でて由良の

地の地頭職に補して住山の資祿として興えたが、この住山の資祿を得たことが、彼れに続いて行勇の弟子となった法燈国師心地覺心の由良の西方寺の開創や、渡宋の物心二面の結縁となったのである。

覺心は東大寺の学生で嘉祿元年（一二二五）高野山に登り、禅定院行勇に投じて禅密二教を伝受した。⁽³⁾また覺心は伝法院の覺仏や行勇が密教を学んだ正智院の道範から密教の諸尊儀軌を習得している。⁽⁴⁾

延応元年（一二三九）行勇に随って寿福寺に入った時に行勇は七十七才、覺心は三十三才で寿福寺の紀綱を司ったが、行勇は七十九才で寂した。そこで覺心は参禅行脚を志し、入宋した僧を訪ねなどして入宋の志を高め、遂に願性の助けをも得て入宋することになったのである。

仁治三年（一二四二）覺心三十六才、城南深草極楽寺に道元禅師に参じて宋国如浄禅師直伝の菩薩戒を受け、⁽⁵⁾宝治元年（一二四七）法姪に当たる上州長楽寺の榮朝を訪ねたがその秋に寂したので、翌年入宋伝法の僧である勝林寺の思順に参禅して入宋の志を高め、更に榮西の弟子榮朝と行勇に学んで七年間宋にいた東福寺の聖一国師辨円を訪ねて入宋の指示を仰いだ。翌年建長元年（一二四九）覺心四十

三才、願性は覺心に渡宋の旅装を調べて興え、由良から博多に行き三月二十八日出航した。⁽⁶⁾ 覺心は諸山を行脚すると六年間、仏眼から月林語対御録・無門関等を授かつて建長六年（一二五四）四十八才博多に着いた。皈朝するや金剛三昧院に到って先師行勇の直前に礼拝し、即日金剛三昧院の第一座となったが、住すること四年で願性を訪ねて由良の地に移った。⁽⁷⁾

覺心と願性は共に行勇の弟子であるが、覺心が高野山に登って行勇に隨身した頃には願性も高野山にいた。両者は一度相逢うや旧知の如く共に格別の親交を持ったようで、願性は予ねてから実朝公のために、雁塔の建立を志していたので、覺心を由良の海浜に招き勝地を定め、由良庄の資力によって西方寺（後の興国寺）を建立して、実朝の鬢毛を納める雁塔を造立した。⁽⁸⁾ この願性と覺心との間に成った西方寺のことは未だ行勇の在世中であり、覺心の入宋前のことであるが、覺心が入宋するに当たっても、この両者の親交のあったことから観ると、辨円や思順の入宋の奨めがあったことは元よりではあるが、また実朝の入宋の志を受け、ても果し得なかった願性が、実朝の分骨を医王山に納めることを託すのと相俟って、願性が大いに力を興えたことを

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禪師（竹田）

知っておかなければならない。

覺心五十二才、金剛三昧院の住持を罷めて願性を慕い由良の鷲峯樂其山に遊んだが、互に旧懷の情に堪えず、覺心にこの地に生を終えるの志のあることを知った願性は、覺心を拝請して開山となし、西方寺の寺名を鷲峯山興国寺と改めた。⁽⁹⁾ 興国寺を終老の地と定めた覺心は、文永五年（一二六八）六十二才の時に鎌倉寿福寺への招請があったが、これを固辞して起たなかった。⁽¹⁰⁾ 覺心は恐らく、北条氏の政略によって殺された実朝を悼んで鎌倉に皈らないで出家した願性にも想を寄せて、互に永住の地として示し合わせた由良の地を離れなかったものと思われる。

覺心はまた文永三年（一二六六）六十才の時、生母を信州から由良の地に伴ない来て出家し妙智と名乗ったが、翌年亡くなったので塔を造立し、梵漢の種子を書いた大塔婆を立てて、毎日定まって跣足墓前に詣り供養し育生の恩に報いた。⁽¹¹⁾

覺心はまた龜山上皇と後宇多上皇の皈依を受けて城東の勝林寺に出たが、京の繁雜を厭って由良に皈り、後再び両上皇から嵯峨離宮に召されて禅道を説いて、皇情大喜ますます皈依を深くされて京に留ることを願われたが、覺心は

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

居ることなくしてまた由良に皈った。時に年八十才とある。⁽²⁾

覚心は永仁六年（一二九八）九十二才で入寂し、龜山天皇は法燈禅師と諡せられた。その後覚心の滅後三十年を経て、後醍醐天皇は先常二代の皈依された覚心に対して、その消息を便りに我れも亦生身に逢うが如く三代有縁の師であるとして、更に法燈円明国師と諡せられた。⁽³⁾願性は覚心を讃えて、師戒珠無疵。道眼是明。是故道俗冒險。遠近趨風云云。と多くの道俗が師風を仰ぎ集まっとしてゐる。⁽⁴⁾

- | | | |
|------|----------|---------------------|
| (1) | 高野春秋編年集録 | 八卷。大日本仏教全書一三一、一三九。 |
| (2) | 同 | 八卷。同 |
| (3) | 同 | 八卷。同 |
| (4) | 本朝高僧伝 | 二十卷。同 |
| (5) | 同 | 二十卷。同 |
| (6) | 円明国師行実年譜 | 。続群書類従二二七卷。九上、三五二。 |
| (7) | 同 | 。同 |
| (8) | 同 | 。同 |
| (9) | 同 | 。同 |
| (10) | 同 | 。同 |
| (11) | 同 | 。同 |
| (12) | 本朝高僧伝 | 二十卷。大日本仏教全書一〇一、二八八。 |
| (13) | 同 | 二十卷。同 |

(14) 円明国師行実年譜。続群書類従 二二七。卷九上ノ三三三。

五、覚心の禅と密教

覚心は入宋して護国寺の無門慧開和尚仏眼禅師に相見したが、忽ち機々相投じて無門和尚は「心即是仏。仏即是心。心仏如々。亘古亘今」の偈を説いて印可を与えた。⁽¹⁾建長六年（一二五四）皈朝してから彼れは二回に亘って仏眼禅師に書信によって教を乞い、興国寺に法燈流という臨済禅の一風を開いた。

本朝高僧伝によれば、覚心は興国寺に住すること四十余年、南紀の大化江湖の参徒常に千僧に盈つとあり、室中では常に狗子話を説き、衆に対しては「諸仏悟レ心。衆生迷レ心。諸仏源一。迷悟境分。不_二仮他力_一。自心能知。欲_レ至三仏果_一。須_レ参_二自心_一」と説くなど、禅者としての風格を窺うことが出来る。⁽²⁾

行勇の東密禅と行勇を通しての栄西の台密禅とを学んだ覚心の密教観は何うであったか。円明国師行実年譜に八幡大菩薩の託宣に事寄せて、法相・三論・天台・華嚴・真言・念仏・律宗・禅宗の諸宗の中で坐禅を殊勝となすと⁽³⁾言い、また神殿に坐する時の心地趣向は坐禅なり、禅宗は専ら神

慮に合する故であるとしている⁽⁴⁾。更に本朝高僧伝には熊野妙法山に登って、寺僧が開けることを拒んだ殿堂の扉が、覚心が坐禅をしていると自から開き、寺僧は驚起礼拝し院を改めて禅寺となした。また仁和寺の僧正が久病で諸家の加持によっても効果がないので、覚心に救いを乞うたところ、覚心が坐禅をしていると病が立ちどころに治癒し、僧正は感喜して興国寺の紫金台を寄附したと伝えている⁽⁵⁾。

このように密教の修法は坐禅なりとしたが、榮西・行勇の作法を習得した覚心は、また祈祷修法をも行っている。高野山金剛三昧院から由良に移った覚心は、由良の地には素から妖魅が多く、この地に來る者はみな必ず惑乱に遭うということを知って、覚心は妖魅に仏戒を授け呪を誦して惡魔を退散させた⁽⁶⁾。そして自分が永住の地と定めた由良の地の庶民外護者を安心させ、大いに販信を集めたのである。また興国寺文書の正応五年（一二九二）四月五日、流祖心地覚心が規定した誓度院条々規式第六条「三時勤行事」を見ると、

朝、九条錫杖一反、光明真言十一反、仏眼愛染王、五大尊、藥師真言、各三反、尊勝陀羅尼、消災呪、八句陀羅尼、大金剛輪真言、心經、各一反、

鎌倉期初頭に觀る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

日中。金剛般若經半卷、宝篋印陀羅尼、仏眼愛染王、五大尊、藥師真言、消災呪、八句陀羅尼、大金剛輪真言、心經、各一反、

夕。仏眼愛染王、五大尊、藥師真言、各三反、大悲呪、消災呪、八句陀羅尼、大金剛輪真言、心經、各一反、

とあり、更に第八条「可修真言行法事」によれば、千手・不動・愛染の行法だけは常に必修すべきで、その他の真言行法に至っては面々の意樂に任せて修すべきことが規定されている。これを觀ると、覚心も亦宗旨の民衆化のために現当二世の安穩を祈念したものと見える。高僧傳の作者師蛮が覚心を賛して、王公の寵遇を受けた覚心は大廟皇神と禅を習合して、神の靈驗奇跡は皆禅定からして得るとしたが、真正なる禅者が密法を修する時は、其応影響、禅と密は一に販するのに、それを世の密教の学者は、その本を知らず却って禅を謗する膠執猶未除と評している⁽⁷⁾。

鎌倉期初頭の榮西・行勇・覚心の三者に禅密の交流を觀たのであるが、榮西は葉上流という密教の一派を自から開いて、新しく伝えた黄竜派の臨濟禅を加えた新興宗教から、鎌倉に先任した行勇と共に幕府に接近し迎えられて、遂に寿福寺・建仁寺の建立を得て鎌倉・京都に臨濟禅興隆の基

礎付けをなした。

荣西の新興宗教に皈して荣西の弟子となった行勇は、幕府の呪僧として行蹟を重ね、荣西に次いで幕府の仏事も行い、特に二位禅尼政子の皈依を受けていたところへ、不慮の悪別当公暁の实朝將軍殺害の事変があつて、ここに政子と実朝、実朝と願性（葛山五郎）、願性と行勇の四者の間の親子・君臣・師弟という人間関係から、実朝菩提のための高野山金剛三昧院の修補開創となつて、行勇は開山となり密教に禅を加えた鎌倉の新興宗教を、東密の祖山高野に植えて鎌倉の威容を示し、そして高野山唯一の禅宗寺院である金剛三昧院の吉野朝に於ける門末隆昌の基礎を固めた。

行勇の弟子覚心は行勇の寂後宋に渡つて黄龍派の無門慧開の臨済を博えて皈朝した後は、覚心に物心二面の力を与えた法兄の願性と共に由良の興国寺にあつて、法燈流という臨済の一派を開き、鎌倉に見た新興宗教とは異つた宗風の宣揚に努力した。行勇は密教者が禅の秘要を問うのに対して、「举足下足皆是密印」と答へ密教に禅を入れているが、覚心は「当代相応。利益广大、何宗為最。大士答云。坐禅殊勝」として、坐禅に密教を入れている。

荣西と行勇は密教に禅を、覚心は禅に密教を摂入し止陽

せんとしたものと言える。この相違は新たに禅を伝えた荣西に、建久二年に「禅宗停止」の宣下のあつた時代的背景の然らしめた向もあつたことを考えなければならないが、それを鎌倉・京都・高野に密教禅の禅宗寺院が建てられてからの覚心が、密教を止揚した禅宗という新興宗教に切替えるのも亦当然であつたと言わなければならない。

想うにこれが瑩山禅師の覚心参禅と相待つて、覚心の弟子であつた孤峰覚明や、恭翁運良等の瑩山禅師への参禅受法を通して曹洞禅への接近となり、次説のように、瑩山禅師の曹洞禅の民衆化を助ける大きな力となつたことは、忘れられない事実であると思う。

- | | | |
|-----|------------|-------------------|
| (1) | 本朝高僧伝 二〇巻。 | 大日本仏教全書一〇一ノ二八七。 |
| | 円明国師行実年譜。 | 続群書類従二二七巻。九上ノ三五一。 |
| (2) | 本朝高僧伝 二〇巻。 | 大日本仏教全書一〇一ノ二八八。 |
| (3) | 円明国師行実年譜。 | 続群書類従二二七巻。九上ノ三五七。 |
| (4) | 同 | 同 三五八。 |
| (5) | 本朝高僧伝 二〇巻。 | 大日本仏教全書一〇一ノ二八八。 |
| (6) | 同 二〇巻。 | 同 二八七。 |
| (7) | 円明国師行実年譜。 | 続群書類従二二七巻。九上ノ三五四。 |
| (8) | 本朝高僧伝 二〇巻。 | 大日本仏教全書一〇一ノ二八九。 |
| | 同 一九巻。 | 同 二七六。 |

第二 瑩山 禪師

瑩山禪師が曹洞宗の民衆化のために、辺地の教線の開拓を初めとしてたゆみない化導に終始されて、更に民衆の化導に密教による現当二世の利益を説かれたことは、己に諸氏によって述べられているので、重複を省くこととするが、ここに桜井秀雄氏が「瑩山禪師の生涯と総持寺の歴史」の中に述べているように、瑩山清規を以って「これは只管打坐の仏法からいわば加持呪術への傾斜ともみられようが、大衆のための生き生きとした仏法の挙揚が大師によって打ち出され、それから今日に至るまで、わが宗門の各寺院における諸法要は、ほとんど「瑩山清規」を基礎としていることからいっても、この清規の撰述の歴史的価値は高大なものといわなければならない」(一八七頁)と言われたことは、我々の知って置かなければならない結論とも言うべきであろう。

一、禪師と柴西

誦呪祈祷の秘密修法と仏事を行って幕府に結び付き、鎌

(鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禪師(竹田))

倉・京都に寿福・建仁の二ヶ寺を開創した柴西の業績を知った瑩山禪師は、伽藍仏教の興隆を図るべく、祈祷を修し儀式を莊嚴化して世俗への調和を計り、城満・永光・総持寺等の寺院を開創し、更に後醍醐天皇の皈依をも得られたのである。瑩山禪師が柴西の行履を渴仰されていたことは、瑩山清規の早辰喫粥法の中に、庫内に入る前、

打三庫裡雲版三十六下。慕永平行儀。
是建仁僧正行儀也。

粥了って、

維那引三後唄二処世界梵。是永平儀而
僧正旧儀也。

として、宗祖道元禪師の行儀と渴仰の師柴西の行儀とを調和されている。また秋山範二氏の「瑩山の思想」によると、禪師の「坐禅用心記」の中に只管打坐・打成一片・非思量と坐禅の本来を説いて公案の必要は説いていないが、心若し散乱する時にのみ公案を提撕せよと教え、また「三根坐禅説」には、中根の坐禅は出息入息を断つ工夫をし、或は一則公案を提撕し雙眼を鼻端に付けよと教え、また「秘密正法眼蔵」には十則の公案を挙げて、学人は須らく大善智識と成らんと欲すれば先づこの十則の大事を参ずべし。としていることを挙げて、瑩山禪師の臨済的禅風を觀

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

るとしてゐるが、これまた大衆接化の手段として教えられたことであつて、ここにも栄西の禅風を了知されていた瑩山禅師の調和の程が窺われる。

ただ瑩山禅師が曹洞禅と栄西の禅とをはっきりと区別されていたことは、伝光録に禅師が栄西の家風を評して、「南都北京ヨリサ、ヘラレテ純一ナラズ、頭密心ノ三宗ヲオク」とされていることで解かる。⁽⁹⁾即ち真言・止観の二院を並置した栄西の禅風は不純なものであり、言わば密教に禅を入れたものであるが、瑩山禅師はこれを取捨撰択して、寧ろ法燈国師覚心の禅風を習い、密教を禅に止揚し、時代背景に応じた曹洞禅を宣揚されたのである。

- (1) 瑩山和尚清規上巻。曹洞宗全書 宗源下ノ四三六。
- (2) 仏教研究。昭和一四年 三ノ三ノ四。
- (3) 瑩山和尚伝光録。曹洞宗全書 宗源下ノ一一一。

二、禅師と覚心

瑩山禅師が比叡山を降りて由良興国寺の覚心に参禅されたのは弘安十年（一二八七）——一説には弘安九年ともいう——二十才であり、九十二才で寂した覚心が八十一才の時である。道元禅師に菩薩戒を受け親しく参禅した覚心は、瑩

山禅師を一見して大いにその器局の非凡なることを賞讃して、留めて冬を過ぎしめたという。覚心が八十才の時、龜山・後宇多上皇の皈依を受けて京に留ることを請われたのを断つて由良に皈つていた時である。覚心が京都に留ることを辞退したこと、また彼れが六十二才の時に鎌倉の寿福寺への幕府の招請を固辞して起たなかったことを考え合せると、格別の親交を持った願性と由良興国寺を終老の地と定めたことに因るものと観られるが、恰も瑩山禅師が施主の清浄志に感じて永光寺を予が終焉偃息の処とされたことや、また禅師が文保二年生母懷観大姉のために浄住寺を建てられたことも、先師義介禅師が永平寺の山下に養母堂を建てられたことや、覚心が生母を信州から由良に迎えて孝養を尽したことに想い当たるところがあるではないか。

- (1) 洞谷記。曹洞宗全書 宗源下ノ五〇三。

三、禅師と後醍醐天皇

瑩山禅師は元応二年（一二三〇）五十三才、法燈国師の上足であつた孤峰覚明を使者として遣わされた後醍醐天皇の勅問に対して、親切に且つ明らかに奉答された。⁽¹⁰⁾ 叡感殊

に斜ならず、勅して紫衣を賜わり、翌元亨元年六月総持寺を開創されるや、九月十四日「総持寺」の勅額を下賜され、翌二年八月二十九日綸旨の下賜があって、総持寺は「日本曹洞賜紫出世之道場」の官寺となった。当時禅門の第一位にあった南禅寺と肩を並べて、日本曹洞と「曹洞宗」と公称するに至ったことは、我が宗門史上の一大事と言わなければならない。禅師は皇情により勅願所となった叡感に対して、正中元年五十七才三月十六日「総持寺十箇条之龜鑑」を定められ、その第一条に当寺は檀越がないから、予が嗣法の門人は尽未来際当山を以って本寺となし、輪寺の住持を勤めて宝祚の長久を祈り奉るべしとされている⁽²⁾。

また元亨三年（一三二二）禅師五十五才の時、後醍醐天皇は特に禅師に菩薩戒をお受けになり、また翌三年にはたまたま准后が産期に先立って御不例があり、勅によって総持寺の放光菩薩に祈念したところ、翌年第六王子恒良親王を安産されたことから、禅師の徳望は世に弘まり、放光菩薩は安産の祈念所として世に伝えられるに至った⁽⁴⁾。

(1) 十種疑滞。

曹洞宗全書。宗源下ノ五〇〇。

(2) 総持寺十箇条之龜鑑。

常済大師全集。四九四。

(3) 常済大師略伝。

同。二一。

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

(4) 同

同

二一。

四、禅師の背景にあった禅密兼学の僧

義介は叡山に台密を学習した経験があり、共に永平の門下に入った二祖懷辨に勧められて、正元元年（一二五九）に入宋し、皈朝して永平寺の叢席の興隆に尽力した。中でも土地神・五輓像を造営したことは已に密教的色彩の摂入と言うべく、また洞谷記正中元年（一三二四）の条に「：乙丑二月万吉日。犯土造作等吉日。法堂地引始。一衆普請。飄経消災呪一遍。先師大乘和尚。造営祈禱佳例也。：」とあるのを見ると、一遍消災呪の修法もまた己に義介に始まっている。このように一遍消災呪の説誦は、大衆の普請作務に当り造営祈禱する略行法から始って、爾来各寺の日中諷経、朔望には粥罷に行うこととなり、回向文も附け加えられるに至った。

一遍消災呪（粥罷）

上來誦三誦消災吉祥陀羅尼二所集功德 專祈

山門繁昌修造無難諸緣吉利者

檀那諷経 消災呪一遍（日中）

上來誦三誦消災吉祥陀羅尼二所集功德 專祈 当寺檀那

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師（竹田）

本命元辰福寿増長諸縁吉利者

永平寺の三代相論の禍を受けて、正応二年（一二八九）

義介が二十二才の弟子瑩山を伴って加賀の大乗寺に退いた時、これを迎え導いた澄海は、義介が越前波着寺懷鑑の弟子としていた頃に波着寺にいた達磨宗系の弟子であって、後に加賀の豪族富樫家尚が大日山大乗寺を建てて開山として迎えた人である。永仁元年（一二九三）澄海は家尚と図って、真言院を禅院に改めて義介を迎えたのであって、澄海は元より真言宗の人である。

また元亨元年（一三二一）禅師五十四才の時、諸嶽寺を真言律宗の定賢律師から両師互の夢想感得によって授受されたが、その定賢律師は密教僧であった。瑩山禅師は道元禅師が

有大陀羅尼是名正法眼藏ナリ……一切ノ仏祖カナラズコノ陀羅尼門ヨリ、発心・辨道・成道・伝法輪アルナリ。シカアレハステニ仏祖ノ児孫ナリ、コノ陀羅尼ヲ審細ニ参究スヘキナリ。（正法眼藏陀羅尼卷）

と示された正法に随って、陀羅尼即ち総持の一門は八字に打開すと堂首としての全身を吐露して入門され、律院諸嶽寺を諸嶽山総持寺と改称して密教を禅に止揚されたので

ある。

二祖国師峨山、総持寺の開山瑩山禅師の師席を襲重した二祖峨山禅師は能登国の瓜生田の産であって、その生地能登の総持寺と永光寺に住して、五院二十五哲の勝れた門葉を得られ、全国各地に轉々と新寺を開創して曹洞禅を布衍された業績は当に特筆されなければならない。峨山禅師は叡山に出家して台密をも究めていた学匠であったが、大乗寺にあった瑩山禅師の道心名声の程を伝え知って、永仁五年（一二九七）たまたま禅師の京の東宮御所辺りの草庵に留錫中を訪ねて、密と禅との相違について法問して別れたが、二年を経て正安元年（一二九九）峨山は大乗寺に来て再び禅と密との問答の挙句、禅師から汝は吾宗の器である更衣版投せよとの接化を受けて、峨山は禅師の弟子となった。峨山は正安三年（一三〇一）十二月に大悟、徳治元年（一三〇六）印可証明を受けて叢林遍歴の途に就いた。⁽³⁾時に三十二才瑩山禅師三十九才である。

台密から禅に皈した峨山は師に侍すること十有二年、その間は特に只管打坐から現当二世安穩を祈る法式作法に至る禅師の総ての行持に隨身して、密教の事相を禅に止揚された禅師の一面の助化となったものと思われる。

先日永久俊雄氏が「峨山禪師百符の伝」とある写本一卷を将来して梵字音の調査を頼まれたのを見るに、写本には識語もなく年月日伝承をも記さないで、梵字の書体も乱れていて真偽の程を定めることは出来ないが、内容は四季自然や人生人事の多事多端に亘る除災招福の真言陀羅尼とその加持作法を示したものである。然しこれ等の加持作法は、東密台密ではそれぞれの流派の伝によって「諸大事」として伝えていくことからすると、台密を究めた学匠である峨山が皈禪後も、曹洞禪の挙揚・世俗への調和のために誦呪祈を修せられたことは当為であると思われる。瑩山禪師の理想である叢林仏教から伽藍仏教へと、曹洞禪の全国普及・民衆化の成就に興かって大いに力となった方である。禪師が峨山に対して、汝は洞家の種草となるには堪えるが、洞家の真子となるものは未だないと言われたが、遂には斯くして二祖國師は禪師の真子となつて大総持寺となされたものと言わなければならない。

運良と覚明、恭翁運良と孤峰覚明は瑩山禪師の師表と仰がれた由良興國寺の法燈國師覺心の弟子であつた。運良は道元禪師に参禪した了然法明に就いて得度し、十九才にして永光寺に瑩山禪師を訪ねて入門し、嗣法授受の間際に去

鎌倉期初頭に観る禪密の交流と瑩山禪師（竹田）

つて法燈國師覺心の下に至り、精進并道して大悟を得て、また京都北陸を遍歴していた。たまたまその頃瑩山禪師の永光寺の建立となり、文保元年（一一三二）に永光寺に移住されたが、時に當つて運良を迎えて大乘寺に住せしめられた。瑩山禪師が洞谷記の「山僧遺跡寺置文記」の中に、大乘寺は先師開法の賀州第一の貴寺であつて門徒の中から住持すべき遺跡であるが、今暫らく法燈下の不如意の僧ではあるが止住管領させていると言われていることを想うと、禪師は恐らく運良が自分の弟子であつたことと、彼れが師事した法明も覺心も共に道元禪師に参禪した人であることから、次に述べる覚明と共に、これを禪師自からの傘下におさめて、密教を心得ている法燈流の臨濟禪をも止揚して、洞門の発展に利せられたものではないかと思われる。

覚明は叡山で得度して台教を究めたが、禪宗興隆の時代背景から山を降つて法燈國師覺心の弟子となつて禪を究め、更に運良の師事した了然法明にも参禪し、続いて応長元年（一一三二）元に入渡航した。皈朝して建長寺にいたが、辞して永光寺に瑩山禪師を訪ねた。法問が終つて禪師は覺明に対して、汝は雲州に縁があるからここに留つてはならないと諭され、禪師は覺明に菩薩大戒を授けられ、覺明は

去って出雲国に雲樹寺を開創したのである。⁽⁶⁾ 後醍醐天皇と覚明とは如何なる縁故があったのか、後年の元弘元年（一三三一）天皇が伯州に御幸された時に、覚明を行在所に召して禅の教を聴聞し菩薩戒を受戒され、天皇は覚明に国済国師の諡号を賜っている。⁽⁷⁾ このような天皇と覚明との縁によって、前に述べた元応二年（一二三〇）十種勅問の下賜、元亨元年（一二三二）勅額の下賜、元亨二年（一二三二）日本曹洞賜紫出世之道場の論旨が下され、更に正平八年（一二三三）後村上天皇は瑩山禅師の滅後二十三年に、八十四才の覚明を遣わされて仏慈禅師諡号下賜の恩恵を下されたのである。改めて翌九年総持寺を南朝の勅願所とされた。⁽⁸⁾

覚明は後醍醐天皇に次いで南期の後村上天皇に仕えた。覚明が洛西の妙光寺にいた時、足利尊氏兄弟は覚明に伽藍を開創するから開山にと三度請したが遂にこれを受けないで、夜ひそかに逃れ去った。後村上天皇は覚明を宮中に召して、皇后・太子と共に衣鉢戒法を受けて三光国師と諡号され、和泉に大雄寺を建立して開山とされた。⁽⁹⁾

本朝高僧伝によれば、覚明は雲樹寺の開堂拈香に法灯の資嗣と言ひ、また法灯国師覚心の滅後五十年を経て、由良

の興国寺が虚席となつたのを知つて、興国五年（一二四五）覚明は先師の道場敢えて辞せずとして自から興国寺に住して、幾くもなくして再興したとあるのを見ると覚明は覚心の弟子となるが、一方洞谷記正中二年七月二十八日の条に

同日夜半。明兄付法。相伝坐具。是予末後、法嗣也。

即曉天出寺往雲州。

とあつて、特に是れ予が末後の法嗣なりと言われているのを見ると、覚明は禅師の嗣子となるべきである。而も覚明に嗣法された七月の初二日の条に、当山の住持については嗣法の臘次に随えと教えられ、我れに四門人があるが、それでも住持が闕如した場合は、六兄弟の中から互に励まし興化利生法孫歴代断絶してはならないと厳に示訓されて明峰・無涯・峨山・壺安・孤峰・珍山の六兄弟を挙げているが、その中にも孤峰覚明の名がある。⁽¹⁰⁾

洞谷記の正中元年正月十一日と五月一日の条に、禅師と覚明の法問の次第が記され、また正中二年四月十四日の条には大布薩に用いる籌竹の竹材を覚明が遠州から持つて来たことが記るされていることから、覚明が雲樹寺にあつて、

正中元年正月或は前年の元亨三年の冬頃から永光寺に来ていたのではないかと窺われるが、これを正中二年八月十五日、瑩山禪師が示寂の僅か半月前に覚明に嗣法し、直ちに雲州に皈されたことを思い合わせると、ここに後醍醐天皇を中心とした禪師と覚明との道心交游がいよいよ深く高まって、遂に禪師の最後の嗣法となったものではあるまいかと思われる。免に角、前に記した運良と共に北陸・山陰の法燈流の臨濟禪は、密教を禪に止揚した瑩山禪師の家風とともに、洞門の興隆にも貢献することとなったのである。

- (1) 洞谷記。曹洞宗全書 宗源下ノ五一九。
 - (2) 正法眼藏陀羅尼卷。同 宗源上ノ三八五。
 - (3) 総持二世峨山和尚行状。続群書類従二三五卷九下ノ五七九。
 - (4) 同 同 五七九。
 - (5) 洞谷記。曹洞宗全書 宗源下ノ五一六。
 - (6) 本朝高僧伝 二九卷。大日本仏教全書 一〇一ノ四〇六七。
 - (7) 同 同 四〇七。
 - (8) 同 同 四〇七。
 - (9) 同 同 四〇七。
 - (10) 同 同 四〇七。
 - (11) 洞谷記。曹洞宗全書 宗源下ノ五二五。
- 鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禪師（竹田）

(12)	同	五二五。
(13)	同	五一八。
(14)	同	五二三。
(15)	同	五二四。

むすび

瑩山禪師が教線の拡張・伽藍仏教興隆のために、密教にみる現当二世の利益を説いて世俗への調和を図られたその実相を述べるべきであるが、それは己になされている他の研究に委ねて、ここにはただ斯くある時流の一面を尋ねて、何か落穂を拾い集めたいものであると歩を進めてみたが、己に腰弛みて意に委せず、想を全うし得なかったこと、まことに慚愧に堪えない。

鎌倉期初頭の禅密の交流を要約すると、鎌倉期の初頭に新しく臨濟禪を伝えた栄西は、旧仏教と禅の調和を図りつつ鎌倉幕府に結び付いて立ち、鎌倉・京都に新宗教宣布の基礎を獲得し、続いて古くから幕府に關係を持っていた弟子行勇は大いにこれを助け、更に金剛三昧院の開創を得て高野山に禅密兼修の道場を起し、兼ねて幕府の威力を高野山に植した、更に弟子覚心は二位禅尼政子と幕臣葛山五郎

鎌倉期初頭に観る禪師の交流と瑩山禪師（竹田）

入道願性の助けによって、紀州由良の地に開いた異国寺を拠点として、禪と旧仏教の調和を図って、密教を禪に止揚した法燈流という臨済禅の一派を打立てたのである。

覺心に続いた年代に出られた瑩山禪師は、まことに高邁な識見と洞察力の勝れた時流に順応する力量の最も卓越した方であったと言わなければならない。それは述べた次のことによって確かめることが出来る。即ち瑩山禪師が世俗への調和主義を執って、密教を禪に止揚されるに至ったことは、己に鎌倉期初頭に幕府を中心とする時代的背景からなされた禅密交流の実際面から生れ出た時流が、禪師の慧眼に映じたこと、懷辨禪師に兆した伽藍仏教興隆の遺志と清規改訂のために入宋した先師義介の業績とを背負って立たれた禪師は、高邁な識見と洞察力とによってそれを時流に乗せられたこと、更にこれを助けた多くの師や弟子を得られたこととによって、曹洞宗の今日を見る地域的發展を成し得られたということである。

ここに繰り返して言いたいことは、瑩山禪師の民衆化導に現当二世安穩を説かれたことが即ち教線の拡張・伽藍仏教の興隆であって、新興宗教の必らず踏むべき道であったことである。このようにして成った瑩山禪師の曹洞禅は、

「純一ナラズ、顕密心ノ三宗ヲオク」として自から否定された栄西の禅ではない。極言するなれば、高祖道元禪師が「有大陀羅尼是名正法眼藏……コノ陀羅尼ヲ審細ニ参究スヘキナリ」と示された礼拝即只管打坐の正法に随っての転法輪であると言ひ得る。総持の一門八字に打開するの全身吐露の化導であつたのである。

法孫たるもの、よろしく陀羅尼をも心得て、瑩山清規を基盤とする行持規範を信受奉行すべきである（完）

新刊紹介

『伝光録白字辨』

A5版 非売品

瑩山禪師奉讃刊行会

昭和四十九年四月一日覆刻